
7年前 1月6日 ～祈り～

なんじ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

7年前 1月6日 〵祈り〵

【Nコード】

N2609A

【作者名】

なんじ

【あらすじ】

『揺れる警視庁』の7年前。すべての始まりのあの事件の日、7年後に、事件に関わる事になった者達は一体何をしていたのか、どう事件に関わっていたのか。

7年前　1月6日　く祈りく

テーブルの上におかれたトレイを見て、そばかすの女の子が声を上げる。

「あれ、みっちゃんの分のミルクが無いよ?」

店員は、伝票と、トレイの中の品物を見比べて赤面する。

「失礼いたしました。」

すぐお持ちいたします」

遅れてやってきたミルクを飲みだすと、ぐずっていた赤ん坊は、すぐに笑顔になった。

女の子は、大きな口を開けて、ハンバーガーにかぶりつく。と、母親が眉をひそめて言う。

「朝美さん、お行儀が悪いですよ」

朝美は、母親に気付かれないように小さく舌を出し、それでも二口目からは、上品に口を開け、ハンバーガーをかじった。

「お母さま、そろそろお家に、戻れないのですか?」

「仕方ありませんね。」

家に戻る道路が、まだ、通行止めになっていますから。けれど、じきに警察の方が爆弾を止めて下さいます。

そうすれば、すぐに、お家に戻れますよ。

さ、心配せずお食事なさいな。

あ、光彦さん、牛乳がこぼれてますよ」

牛乳のパックを持ったまま、赤ん坊は居眠りを始めていた。母親は、赤ん坊をイスから抱き上げると、優しくゆすった。

「疲れたのね、光彦さんも。」

早くおうちへ帰って、ゆっくり休みたいわね」

「上の空で仕事をしちゃ、ダメよ」

由美は、軽く美和子の背中を叩いた。

「注文間違い、さっきから連続5回目よ」

ポテトに塩を振りながら、由美は言う。

ヘリコプターの音が、その声を半分消した。

由美は見えもしないそれを、目で追うように、天井を見上げた。

「まだやってるのね、犯人、捕まらないのかしら？」

由美の言葉を聞いて、美和子が悔しそうに言った。

「私も早く捜査に参加したい。

無関係な人人質に、爆弾で脅迫して金を脅しとろうなんて

卑怯な奴を野放しには出来ないわ」

由美は、軽く両手を上げた。

「美和子、あせらない、あせらない。4月から、警察学校とは言うても、

私たちはまだ大学生。

今は、目の前のこの仕事をちゃんとする方が先決よ。

そもそも、美和子でしょ。

刑事になって、捜査をする時に参考になるかもしれないら

色々なバイトをしたい、って言い出したのは」

美和子は、感情的になりすぎた自分の態度に苦笑しながら答えた。

「ええ、そうなんだけど、でも周りが、こうざわつくと

私、どうしても気になっちゃって」

数台のパトカーの音が、ドップラー現象を起こして消えていく。

「確かに慌しいわね。

まさか、犯人逃げちゃったとか」

由美は軽い口調で言った。

「冗談じゃないわよ。

絶対捕まるわ。

だって皆、正義のためにがんばっているんだから」

美和子は、自分に言い聞かせるように強く言い切った。

由美は親友を見つめた。

彼女にとって、いまだ行われていない正義があることを由美は知っていた。

「でも、敵討ちのためなんかには、刑事になりたいわけじゃないのよ」
美和子は、自分の父親の事を話した時にそう言っていた。
そう、もう子供じゃあない。

親友は、常に正義が、報われる物でもない、理性では、納得している。

でも、感情は・・・。

由美は、美和子に、優しく応えた。

「そうよね、正義は必ず勝つのよ」

マンションの一角で、赤ん坊が泣き叫んでいた。

母親が、ベッドから抱き上げ優しくあやしても、泣き止む気配が無い。

電話が鳴った。

「ああ、あなた。ええ大丈夫。

あのマンションは、うちから見えるけど、離れてるでしょ。

うちは避難しなくていいそうよ。

でも、歩美ちゃんが、ヘリコプターや、パトカーの音を怖がっちゃって・・・」

電話の後も、赤ん坊は泣きつづけた。

顔が真っ赤になっている。

いつもは、大人しいいい子なのに。

これほどひどく泣くのは初めてだった。

赤ん坊でも、あたりを覆う、この張り詰めた雰囲気がかかるのだろうか？

「大丈夫よ、歩美ちゃん。」

お母さんがいっしょよ。

よしよし、いい子、いい子」

少しづつ、泣き声が収まってくる。

ふと、窓の外に、遠く見える、マンションに目が行く。

いつもと同じ、建物。

けれど、あの中に！。

母親の不安を感じたのか、再び赤ん坊は火がついたように泣き出した。

母親は、慌てて、窓から離れ、赤ん坊を優しくあやす。

「大丈夫、大丈夫。」

歩美ちゃん、大丈夫よ」

自分にも言い聞かすように、母親は、いつまでも同じ言葉を繰り返した。

高木は車を止めた。

助手席の女性は、口を尖らせて言った。

「ちょっと、どうしたのよ、高木君！

私、急ぐって言ったでしょ」

「七瀬さん、ごめん、でも、ほら、あそこ」

高木の指差す方向には、路肩にうずくまる妊婦と、心配そうにあちこちを見回す男性がいた。

「困ってるみたいだ」

「そんなの、私に関係ないわよ」

苛立ちで、とがった声が高木の耳を打った。

車から降りようとする高木に、七瀬はわめいた。

「ちょっと、おせっかいなんかしなくってもいいじゃない。

私を、コンサート会場まで、送ってくれるんじゃないの？」

「送るよ。でも、あの人たち、ほっておくわけには行かないよ」

「えー、信じられない！病院なんか送ってくれ、

何て言われたらどうするのよ。

いいわ、もうあんたなんか!」

七瀬は、車から降りると、音高くドアを閉めた。

「まったく、裏道知ってるって言うから、

こんなダサイ車に乗ってやったのに!」

突き刺さるようなヒールの音を立てて七瀬は、去っていった。

高木はため息をついた。

「らしくない事を、するもんじゃないな」

運転免許を取ったお祝いにと、数日前に祖父から譲り受けたパブリカに乗って大学の講義に出てみた。

その高木に、1学年下の七瀬が声をかけてきたのだ。

今年度の学園祭で、クイーンに選ばれた、美女。

以前、ピザ店でほんの僅かの期間だが、いっしょにバイトをした事があった。

もっとも、七瀬は、仕事が嫌で、すぐ止めてしまった

高木は、彼女とほとんど口をきいたことがなかった。

それなのに今日、七瀬が突然、高木に親しげに話し掛けてきたのだった。

「ね、お願い。困ってるのよ。

今日、私を、コンサートまで運んでくれる約束してた子が

爆弾騒ぎの交通渋滞に巻き込まれて、来れないのよ。

高木君、確か、ピザの配達のバイトのしてたから、抜け道に詳しいんでしょ?」

高木の車を、自分の足にしようとする魂胆は見え透いていたが、

それでも、「女の子」を、車の助手席に座らせてみたい

と言う、誘惑には勝てなかった。

「ダサイ車か、ま、そうだな。クーラーも無いし。

でも、おれにとっては、思い出の詰まった、いい車なんだけどね」

高木は、パブリカを見て、かすかに笑みを浮かべた。

それから、そもその発端になった、夫婦の所に、歩み寄った。

「大丈夫ですか？」

いきなり、男に胸倉を捕まれる。

「これが大丈夫に見えるか！」

じきに赤ん坊が生まれるんだぜ！

さっきからタクシー待ってるのに、ちっともこねえじゃねえか！」

妊婦が、うめき声を上げる。

男は慌てて、その背中をさすってやる。

高木は、少し咳き込んだ後で、言った。

「表通りは、爆弾騒ぎの交通規制のせいで、大渋滞ですよ。

だから、タクシーが、来られないのかも」

男の顔色が変わった。

「なんだって！」

おい、一体どうすりゃあいいんだ。

くっそお、おれが病院まで、負ぶってくしかねえか。

かあちゃん、がんばれるか？」

男は、かがんで、妊婦に背を向けた。

「それより、僕の車に乗って下さい。

病院は、米花中央病院ですか？」

そう言う高木を、男は驚いたように見た。

「い、いや、その隣の米花マタニティークリニックだ」

「分かりました。

そこなら、ここから、裏道だけを通っていけます。

さあ、車に乗って！」

高木は、慎重に、かつスピードを出して、運転し、病院に無事に着いた。

妊婦は、すぐさま、病院内に運び込まれた。

男は、その後を追おうとして立ち止まった。

「兄ちゃん、感謝するぜ。」

礼をしたいから、名前と住所を」

「そんな事より、早く奥さんの所へ行ってあげて下さい。」

じゃ、僕は、これで」

高木は、あたふたと、病院の玄関に止めたままの車を、発進させた。

車の中には、まだ、七瀬の化粧の残り香がある。

高木は、窓を全開にした。

冷たい1月の風だが、心地よい。。

「ちゃんと、赤ちゃん、産まれたかな？」

ああいう、夫婦っていいよなあ。

でも、まずは、彼女、だな。

彼女かあ。

美人に越した事は無いけど、七瀬さんタイプは、やっぱり俺向きじゃない。

そうだな、さっきみたいな事があったら、俺より先に

「高木君、何ぐずぐずしてるの！」

早く、あの人たちを車に乗つけてあげて！」

なんて、言ってくれる人が良いかな？

しっかりしていて、でも、ちょっと涙もろくって

優しくっていつか、そんな人に会えるかな？」

高木は小さくつぶやいた。

「会えますように・・・」

そして、つめたい風にさらされているにも関わらず、その頬は赤く染まった。

赤ん坊の産声に、父親となった男は飛び上がった。

優しく微笑む母親と、丸丸と太った赤ん坊の横たわる

ベッドの脇に男は、しゃがみこんだ。

「さっきの、お兄さんは？」

「それが、名前も言わずにさっさと行っちゃった」

「あんた、車のナンバー、見なかったのかい？」

「あ！」

小さく、声を上げた、夫を妻は、ため息をついて見た。

「まったく、気が効かないんだから」

「てやんでえ、おめえだって見てねえだろう」

「私は、子供を産むのに忙しかったからね。」

ぜひお礼がしたかったんだけど。まあ、しかたない。

ご縁があれば、またいつかどこかで、

お会いする時もあるだろうさ」

赤ん坊が、もぞもぞと動いた。

「さて、父ちゃん。いい男の子だよ。」

考えてたって言う、名前を付けておくれよ」

父親は、緊張で、顔を赤くして赤ん坊のこぶしを握った。

「よし。いいか、お前の名前は、元太だ。」

俺たちの息子、小嶋元太だ」

母親は満足そうに微笑んだ。

「元太、いい名前をもらったね。」

お前も、父ちゃんみたいに強くって、

あのお兄さんみたいに、困ってる人を

助けてあげるような、優しい男になるんだよ」

人気の無い図書館で、少女は一人本を読んでいた。

20歳ほどの女が足音を立てて、そこにやってきて、

少女に声をかけた。

" Hi! Shihō! Japanese Unabomber's news now on TV."

(志保、テレビで、日本版ユナ・ボマーのニュースやってるわよ)
Don't you want to watch ?

(見ないの?)

I heard Your sister is in Tokyo
(お姉さん、東京に住んでるんでしょ?) "

10歳になるか、ならぬかにみえる少女は、
読んでいる本から目も上げず、感情の無い声で答えた。

"It's none of your business, Lucky"

(関係ないわ、ラッキー)

ラッキーと呼ばれた女性は、肩をすくめ掌を天井に向けた。

"OK. OK. I'll never bother you."

(分かった、分かったわよ、もうお邪魔しないわ)

It's truth that your farther is
not Japanese but Vulcans.

(あなたのお父さんは、日本人じゃなくて、バルカン星人だって
言うのは本当だったのね)

But I'll not become earth pers
on like Captain Kirk nor Dr McCoy

(でも、私は、カーク船長や、ドクターマッコイみたいにはなれないわ)

Live long and prosper, Mr. SHIH
O"

(さよなら、志保さん)

ラッキーは、来た時と同じように、足音を立てて去っていった。

志保は、安堵のため息をついた。

これで、もう彼女は、私におせっかいを焼かないだろう。

もともと、東洋系で、女で、おまけに、どの大学生よりも年下の
志保に、用事のあるとき以外話し掛ける人間は、

ラッキーのほかに誰もいなかった。

油断していたのだ。

両親の研究を引き継ぐために、組織によって留学させられた自分だというのに、つい、数少ない女性の同じ学部的大学生と言う事で

ラッキーと、少しばかり個人的な言葉を交わしてしまった。

いや、彼女にも、遠くはなれた自宅に、志保と同じくらいの妹がいて、志保にも、彼女と同じくらいの姉がいる、と言う事で抱いてはならない親近感を持ってしまったのだ。

慌てて、冷たい態度をラッキーに対して取ったが、彼女はなかなか志保から、離れては行かなかった。

"でも、これで、大丈夫。これで、私は一人になれた。"

志保は、胸に手をあてた。

なぜだか、痛みを感じる。

そのわけを、頭の中から追い出して、志保は思った。

"私は、組織の女。"

組織の人間以外、いえ、誰とも心許す間柄にはなっではいけない。

そう、お姉ちゃん以外の誰とも・・・。

私には、お姉ちゃんがいればそれでいい"

志保は、先刻電話で話した姉の声を思い出す。

爆弾騒ぎに巻き込まれて無いかを心配する志保を、かえって気づかう姉の声。

"私は大丈夫よ、それより志保。"

ちゃんと、食べてる？

本に夢中になって、パンだけ齧って、ご飯を済ませちゃダメよ。

お野菜や、お肉、牛乳だって・・・"

細々と続く姉のお説教の内容は聞いていなかったが、

そこに、あるぬくもりを、本当は、いつまでも聞いていたかった。いいえ、声だけじゃあ寂し過ぎる。

今すぐにでも、会いたい。だけど、それは、許されない事だった。

「一生懸命勉強して、お父さんとお母さんの研究を完成させればまたお姉ちゃんと、一緒に暮らせる。それまでは、一人でがんばらなくては。ああ、でも、どうか早くその日が、来ますように」

今日は何機ヘリコプターを、見ただろう。

ランドセルを背負った、少女は不安な気持ちで空を見上げた。

その傍らの少年は、隣の少女の様子より、イヤホンからの音と、サッカーボールのリフティングに気を取られていた。

「ねえ、新一、犯人捕まったの？」

話し掛けられた少年は、サッカーボールから目を離さないまま答える。

「いや、まだだ。蘭。」

どうやら、警察は、犯人に、してやられちゃったようだな。

金を盗られて、逃げられちゃったようだぜ。

まったく何やってるんだ、警察は」

蘭が再び聞いた。

「ね、新一。誰も死んだりしないわよね」

「へ？」

リフティングを続けながら、新一は、いぶかしげに声をあげた。

「犯人捕まらなくっても、誰も死んだりしないわよね。」

だって、まだ大きな爆弾が、二つもあるんでしょう？」

「大丈夫さ、蘭。」

この犯人は、完全に金目的だから、

金さえもらえば、わざわざ爆弾を爆発させる必要は無いさ。

それに、プロの爆弾処理班が、解体するんだぜ。

絶対、誰か死ぬようなことは無いって」

蘭はうつむいた。

「でも、世の中、絶対大丈夫、なんてことないから……。
お父さんと、お母さんだって……。」

私、新一のお父さん、お母さんと同じように、
うちも、ずっといっしょだと思ってた。

でも、もう3年になるのに、まだ離れ離れ。

私、すぐに戻ってくると思ってたのに、お母さん」

新一の蹴り損ねたボールは、道の端に転がっていった。

蘭は涙のにじんだ目をこすって、笑顔で言った。

「私、バカね、新一。」

爆弾の事と、お父さん達の事なんて、関係ないのに。
でも……。

もし、まだお父さんが刑事で、この事件の捜査をしてたら

お母さんは、お父さんを心配して、戻ってくれるかしら、なんて、
変なこと考えちゃって……」

再び暗くなる、口調を無理に明るくして、蘭は続けた。

「新一が、言うんだから、

絶対、この事件は、すぐに、無事に解決するわ」

蘭の言葉を否定するかのように、パトカーの音が

近くで鳴り響いた。

ヘリコプターの音も、急に大きく聞こえる。

蘭は、自分の体が震えるのを止めようとして、

自分の腕で、自分の体を抱きしめた。

新一は、蘭の両肩に、後ろから、手を置いた。

彼女が安心できる言葉を、幼馴染にかけたかった。

しかし、事件を、ドラマのように、楽しんでいる自分に気がついた

新一は

何も言う事が出来なかった。

『事件』

それは、新一にとって、頭脳を刺激するものだった。

もちろん、それに関わる人がいて、その人たちの痛みや苦しみに対しての

配慮が必要な事も、充分分かっていた。

分かっていると思っていた。

一つの事件が、漣のように、人々に広げる波紋は、どこまで広がるのだろう。

蘭の体から伝わってくる震えを感じながら、

新一は、初めて、事件が直接関係した人だけでなく、他の人々の心までを、

どれほどえぐるのかに思い至った。

できれば今すぐにでも、この事件が蘭に起こした、心の波を静めた
い。

しかし、今の自分は、あまりにも、小さかった。

でもいつか、必ず、どんな事件でも解決できるようになってやる。

もちろん、いくら、捜査に秀でたとしても、

事件の起こす波紋を、すべてなかった事には出来ない。

それでも、事件を解決する事によって、救われる人はいるはずだ。

多分、自分は、そのために事件を解決しなければならぬんだ。

新一は、静かに胸の奥で決意した。

その思いのせいで、蘭の肩に、あてた手に力が入る。

新一の思いが伝わったかのように、

蘭の震えが止まった。

蘭は、腕を体から放し、

握り締めたこぶしを胸に当てて、つぶやいた。

「どうか、誰も、死んだりしませんように。」

皆、家に、無事に帰れますように・・・」

それは、北風の中、

あまりにも小さな、祈りの言葉だった。

（おわり・・・「揺れる警視庁・1200万人の人質」へと続く）

(後書き)

なんじのたわ言)

事件らしい事件のないお話を読んで下さって、ありがとうございます
すm()m。

デジタルリマスター版「揺れる警視庁・1200万人の人質」の、
前付きドラマ?

(勘違いの刑事達(^^))は、面白かったです。
文句無しに楽しめました。

でも、残念な事に、「揺れる警視庁・1200万人の人質」の内容
に、

全然関係がなかったんですよ。

せっかくドラマ仕立てにするのなら、

できれば、7年前の事件に絡んだドラマを見たい・・・

と言う、私のわがままを誰にも言って行くわけにもいかないので
自給自足してしまいました(^^;)

しかし、7年前。

新一、蘭は、10歳か、9歳。

おお!

少年探偵団は、全員赤ん坊だ(^^)!!

こう考えると、子供の成長って早いですね。

佐藤刑事、高木刑事の年令が、わからないので、

一応、仮定として、現在の年令を、

佐藤刑事・・・29歳

高木刑事・・・27歳

ということにしています。

POLICE HOMEと言う、警察庁の採用HPよりまずと大卒後警官になった方は、2年で、昇進試験を受ける事ができるそうです。

しかし、これ以後毎年受けていいのやら、やっぱり、2年おきにしか、試験は受けられないのかは、書いてはないのです。

毎年受けていいのなら、佐藤刑事は現在26歳くらいでもOKですね。

となると、高木刑事は、24歳で、7年前は、17歳、高校生か。高校生の高木刑事は、想像できないので、パスします（^^）。それに、ストーリー上、車を運転していただく必要がありましたから。

ここで、高木刑事（じゃ、まだないですが）が運転している車はアニメ第360話『不思議な春のかぶと虫』で、登場した、あの、車です。

某サイト様のおかげで、アレが『パブリカ』と言う、

昔の国民車だったことを知りました。

さて、最後に、志保ちゃん。

彼女が、本当に、本人の言うように、84歳だったら、大笑いですが、

ま、18歳として、7年前は、11歳。

物心つく前に組織の手によって、留学させられていたらしいので、一応、7年前は、アメリカ在住、と言う事になっています。

あちらは、飛び級があるそうですが、11歳の大学生、はどうでしょう？

ありえそうな気がします・・・。

英語自体の間違ひは、どなたかのご指摘を待つことと、いたしまし

て（^^）

一応、あえて、こう書いた、と言うものだけ書いておきます。

「Mr. SHIHU」は、間違いではありません。

スタートレックを、ご存知の方で、ついでに、ヴァルカン人の名前の法則について、

ご存知の方なら、お分かりでしょう。

（もっとも、最近ではその法則にはしたがってないそうですが）

私にしても、流石に、「宇宙大作戦（スタートレックの邦題）」を本放送では、見たことはありません。

たまたま、ノヴェライズされたものを、少しと、映画のノヴェライズを読んで、

好きになりました。

しかし、ネクストジェネレーション以降も見えてないですし、

おまけに、映像になったものとしては、「故郷への長い道」しか見てないので、

ファンと名乗るほどのものではないです（^^）

というわけで？ラッキーのセリフは、スタートレックをご存知ない方には

わけのわからないものになってますが、お許しくださいm（――

m。
要するに、志保ちゃんに話しかけるラッキーは、

トレッキー（スタートレックのファン）なんだな。きっと（^^）。

さて、長々と、たわ言にお付き合いいただきましてありがとうございます。
います。

楽しんでいただけましたら幸いです。

2004. 11. 15

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2609a/>

7年前 1月6日 ~祈り~

2010年10月18日12時23分発行